

丹波・私市円山古墳と但馬・茶すり山古墳

－日本海沿岸における古墳時代中期の大型円墳をめぐって－

杉原和雄

1. はじめに

丹波(713年に丹後分国)と但馬は隣国で共に山陰道に属し北は日本海に面する。現在も丹後を含め三丹地域とよばれ何かと近い関係にある。天武朝の七世紀後葉に丹波から但馬が分国されたとの所伝もあり、律令期には丹後国5郡、丹波国6郡、但馬国8郡で仮に「丹(旦)」という領域を想定すれば19郡を擁することになる。両地域の交流は縄文時代早期の押型文土器に始まるが、弥生時代後期に至り同一の墳墓祭式をとるなど早くから密接な関係にあったことは最近の考古学的調査が示している。

私市円山古墳は1987から88年、茶すり山古墳は2001から02年に発掘調査され、関係機関や地域の人々の尽力があって工法変更により現状保存が図られた。その後、国の史跡指定を受け、私市円山古墳は1993年5月から、茶すり山古墳は2010年4月から古墳公園として開放された。先に私市円山古墳が注目されたが、15年後に規模内容共に上回る茶すり山古墳が確認され、丹波・但馬の古墳時代は新出の大型円墳によって再考されることになった。私市円山古墳については本論集の第2集等^(注2)で集中的に取り上げられたが、両者とも近畿で最大級の円墳であり、極めて畿内的であることから被葬者が倭政権からの派遣将軍なのか在地の大豪族なのかといった議論が成されてきた。

両古墳は、ともに山間地の福知山、和田山盆地のほぼ同一緯度上にあり互いの距離は約30kmである。私市円山古墳は日本海側の由良川河口まで25km、茶すり山古墳は円山川河



第1図 私市円山古墳
(2010/05/28撮影)



第2図 茶すり山古墳
(2010/05/29撮影)

口まで36kmに位置している。また福知山盆地はいわゆる由良川－加古川ルートの通過点で南の篠山盆地、播磨・摂津とつながり、和田山盆地は円山川－市川ルートで播磨の中枢部につながる。本小論では私市円山古墳と茶すり山古墳を中心に大型円墳の意義や両盆地に展開した古墳の動向等について検討したい。

2. 私市円山古墳と茶すり山古墳

(1) 私市円山古墳(京都府綾部市私市町字円山)と福知山盆地の古墳

私市円山古墳は由良川の中流域に広がる東西15km、南北4kmを測る福知山盆地の中央部北側の丘陵先端部にある。集落との比高差は約60mである。盆地の至る所から望むことができるし逆に墳頂部からは盆地を広く一望することができる。

墳丘は直径71m、高さ10mの円丘に、長さ10m、幅18mの造出しを付設し全長は81mである。墳丘は3段築、葺石は2段に葺かれている。埴輪列は墳丘裾部には無いが墳頂を含め3列あり原位置を保つものが160本以上確認された。円筒・朝顔・形象埴輪がある。円筒埴輪は黒斑のあるもの7に対し無いもの3の比率である。葺石は人頭大のものを含む比較的大きな河原石を多用したもので作業上の区画石も認められた。

主体部は3基あり、第1、第2主体は組合式箱形木棺を粘土で覆ったものであるが畿内の粘土槨構造に比べると床に粘土貼りが無く省略化されている。両棺はほとんど接して南北に並列し、各々東枕である。棺の長さは第1が3.8m、第2が4.0mである。副葬品の配置や員数は第4図と付表の通りであるが基本的には両者は酷似している。相違点としては



第3図 福知山盆地の主要古墳(注2『私市円山古墳』から。一部改変)

第1主体では鏡と玉類が足元に、第2主体では頭部に置かれていること、第2主体は西端の副室に農工具類を一括して置くが第1主体は農工具をもたずに胡籙があること、武具は共に足元側に1領ずつ置かれるが第1主体のほうが頸甲等一式をそろえていることなどであろう。第3主体は第2主体の墓壙東南端に接し第2主体とは主軸を90度違えている。長さ2.4m、幅1mの浅い土坑内に農工具ともとは矢柄付きと推定される鉄鏃群が両端に分けておかれていた。上部の削平が著しく当初の埋納状態を知ることができないが中央の空気が長さ約0.8mしかないことや土坑の規模、構造などから第1、2主体に伴う鉄製品の共用埋納土坑と考えるが、調査者等は埋葬施設と判断している。本古墳の中心埋葬者は棺の規模、副葬品から第2主体であり中期中葉頃の築造と考えて良い。

次に福知山盆地に所在する古墳と私市円山古墳との関係を考えてみたい。

福知山盆地には後期古墳を中心に約2000基の古墳が知られるがなかでも私市円山古墳は最大である。35基在る前方後円墳のうちで最大の高槻茶白山古墳でも全長は54mにすぎない。弥生時代後期後半から古墳時代初期にかけて方形の台状墓が丘陵上に築造され、丹後地域に比べると鏡片も含め銅鏡が比較的豊富に副葬される。古墳時代前期・中期では一辺20mまでの方墳が主流で築造数も少ない。前方後円墳は前期末頃として近年新しく確認された綾部市四文字山古墳(私市円山古墳の西側丘陵上)と福知山市広峰15号墳(景初四年銘鏡出土)があげられているが定型化した前方後円墳とは言い難く、特に後者は不整形であり方形墳の可能性も残される。中期末頃から前方後円墳は定型化し、各河川流域に全長30から40m級の首長墓が継続して築かれる^(註3)。後期の前方後円墳が多いことは丹波で群を抜いている。盆地内における最も大きな画期は綾部市菖蒲塚古墳(一辺32m)、聖塚古墳(一辺54m)の築造であろう。隣接する両墳は平地に築かれた大型方墳で共に周濠を持ち墳丘は二段築成、造出しを付設し埴輪、葺石を備える。菖蒲塚古墳は主体部・副葬品については不詳であるが、聖塚古墳は遺物に粘土の付着があることから粘土槨と推測され、三角板革綴短甲や武器を持つ。両墳は規模に差はあるものの畿内の要素が強く二基並列した様は互いに密接な関係にあったと想定される。埴輪の型式から菖蒲塚古墳が先行する^(註4)とされているが中期前葉の近接した時期の古墳であることは疑えない。従来この両墳は当地域の伝統的な方墳系譜の中で捉えられ倭政権が在地の有力者をとりこみ政治的な進出を果たしたものとされてきた。その評価を否定はできないものの当盆地では極めて珍しく平地に築造されていることに加え周濠、段築、造出し、埴輪、葺石、粘土槨を備えるなど畿内の大王墳周辺の中期型方墳が突然当地に現出した感が強い。つまりこの両墳は畿内の大王墳に従う側近等と密接な関係を持った畿内型方墳と捉えられ、ヤマトからの派遣者とまでは断定できないものの極めて強い関係者といえるのではないか。当盆地では両墳が出現するまで全

る。正次1・2号墳は私市円山古墳とともにこの地域に初めて導入された円形の古墳であるが副葬品は1号墳の鉄剣と竪櫛のみであり私市円山古墳との格差は歴然としている。このような流れの中で由良川中流域の盆地を一望する場所に築かれた私市円山古墳はこの地域一帯を政治的に支配した最初の大首長といえるであろう。丘陵上に在ること、円墳であること、主体部の粘土使用方法や構造、墳丘下段のみ葺石を用いない手法などに在地性を認めるものの、段築、造出し、副葬品のセット、穴窯焼成の埴輪などはきわめて畿内的である。有力首長の象徴とされる武具を1領ずつ持ち合わせなおかつ副葬品にみる質量のバランスは2人の被葬者が兄弟関係に在ったのではと推測させる。茶すり山古墳と同様にこれだけの規模を有する大型円墳が前方後円形をとらないことの明解な説明は難しいが、被葬者が在地の成熟した大豪族でありその首長が倭政権との間に政治的結合を果たしていた結果であろう。福知山盆地において、畿内型大型方墳である聖塚古墳の被葬者から地域大首長の座を継承することを許された私市円山古墳の被葬者一族は、方形墳からひとつ上位の格付けを与えられた。その証が大型円墳の姿として具現化されたのであろう。

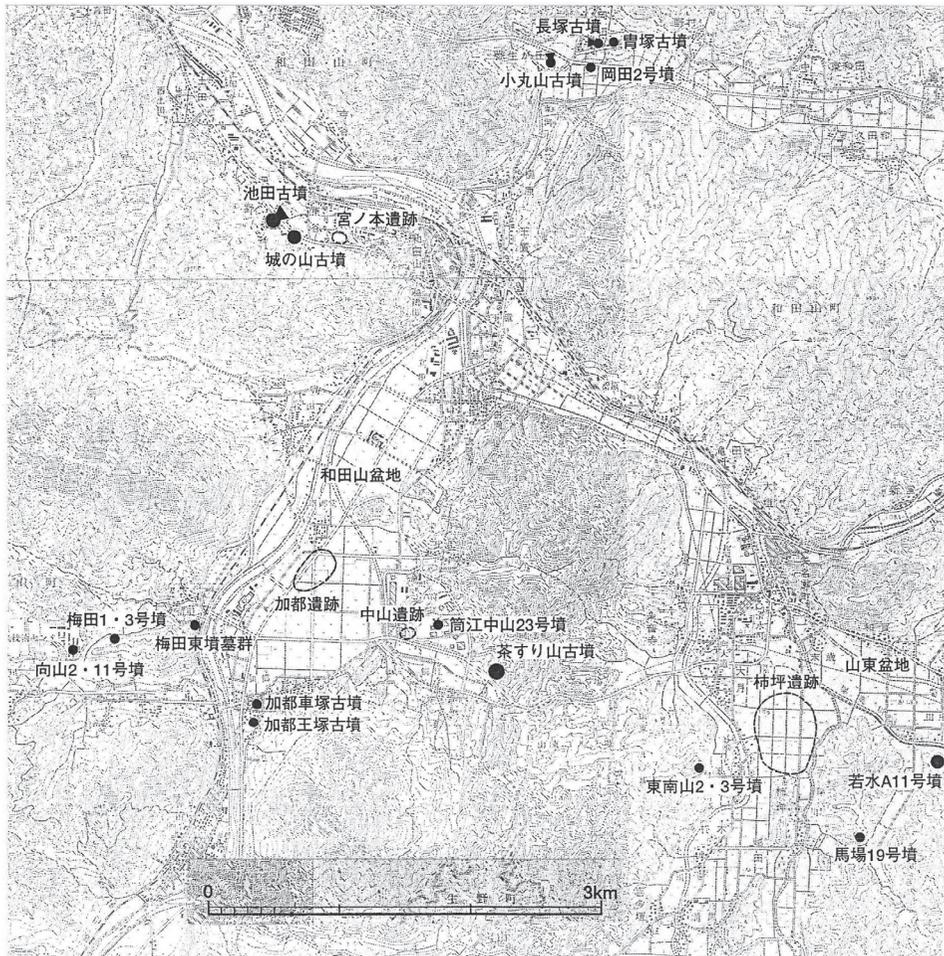
(2) 茶すり山古墳(兵庫県朝来市和田山町筒江)と和田山・山東盆地の古墳

和田山・山東盆地は円山川の上流域に当たり与布土川、粟鹿川等の流域に開けた小盆地である。両盆地は東西に並び中央には山地が介在するものの北側は谷筋により結ばれひとつづきの盆地と見て差し支えない。両盆地の東西幅は7kmで福知山盆地の約半分である。茶すり山古墳は両盆地のほぼ中央にある宝珠峠西側の丘陵先端部にある。

墳丘は直径90m(全国第4位)、高さ18mを測り私市円山古墳より一回り大きい。谷部平坦地との比高差は約40mである。造出しはない。墳頂部からの眺望は西側のみ開け和田山盆地の南半部を一望できる。2段築成で墳頂部と斜面テラスに埴輪列が廻るが原位置を保つのは頂部で11ヶ所、テラス面で1ヶ所であった。第1主体上部には家形埴輪群が良好な状態で遺存していた。葺石は2段の斜面に認められたが地山の小石を使用した貼り石状のもので通常見る古墳の葺石観とは異なっている。埴輪列、葺石は後世の城郭普請のため大きく損なわれたらしい。埴輪には黒斑が認められ穴窯焼成の製品は無いとされる。

墳頂部は墳丘裾の円形ラインからすると東に片寄っているがその平坦面は広く長楕円形を呈する。埋葬施設は大小2基を南北に並列していた。ともに東頭位である。副葬品の配置と員数は第4図と付表に示したとおりである。

南側の第1主体が本古墳の中心埋葬である。長さ8.7mの長大な組合式箱形木棺を4区分しているが中央の2区画がやや大きい。被覆粘土と粘土床から粘土槨として良いものである。第2主体も組合式木棺で2ヶ所に仕切り板を設け棺内と棺外に分けているが被覆粘土はない。第1、2主体とも遺体を安置するいわゆる棺内は礫敷であることが注目され



第5図 和田山・山東盆地の主要古墳(注1『茶すり山古墳調査概報』から。一部改変)

る。両主体の副葬品のあり方には相違点が多い。中心主体たる第1主体では盾5枚を含む極めて豊富な武具・武器が配されるのに対し、第2主体は鏡、玉類と農工具が主要品となっている。鏡の面数も3対1であるなど第1、2主体は棺の大小に加え副葬品の差異は歴然としている。私市円山古墳の両被葬者が男性でほぼ同格であるのに対し茶すり山古墳は第1主体が男性、第2主体が女性ではないかと推測させるものである。また両主体とも副葬品は区画を設けた上で種別を意識して整然とした配置としているが、この原位置を保つ配置状況は当時の祭祀に対する人々の思いが生き生きと伝わってくるようである。

中期古墳に特徴的な副葬品とされる豎櫛は、茶すり山古墳第1主体では頭部付近の鏡、玉類と共に4点、東区画の甲冑群の草摺の上から6点、第2主体では枕石周辺で大小2点が出土している。私市円山古墳の豎櫛は第1主体では草摺の周囲から玉類とともに11点、

付表 私市円山・茶すり山古墳の副葬品一覧

	主体部	鏡	玉類	武器類	武具類	農工具類	その他	
茶 す り 山 古 墳	第1主体	中央区画	盤龍鏡 対置式神獸鏡 連弧文鏡	勾玉1 管玉33 ガラス管玉1 ガラ小玉1209	鉄刀10 鉄剣8 蛇行剣1	盾1	鉄刀子1 針状鉄製品1	豎櫛4
		東区画			鉄剣9 蛇行剣1 鉄鏃19	三角板革綴襟付短甲1 長方板革綴短甲1 三角板革綴衝角付冑(鍔付)1 堅矧板鍔留衝角付冑(鍔付)1 三尾鉄1 頸甲1、肩甲1 草摺片 盾1	鉄刀子4 鉄斧4 鉄柄付手斧2 棒状鉄製品8	豎櫛6 不明鉄製品2
		西区画(東)			鉄刀19 素環刀太刀1 鉄槍15、鉄鉾19 鉄鏃370	盾3		
		同(西)				盾2		
	第2主体	中央区画	浮彫式獸帯鏡	勾玉2 管玉14 ガラ小玉730	鉄刀2		針状鉄製品9	豎櫛2
		東区画					鉄刀子7 鉄鏃13 手鎌10 鉄斧10 鍬・鋤先3 鑿3 ヤリガンナ4	不明鉄製品2
		西区画			鉄鏃14			
私 市 円 山 古 墳	第1主体	棺内	櫛歯文鏡？ 勾玉2 管玉8 ガラ小玉26 水晶小玉16 棗玉1	鉄剣2 鉄鏃38 胡籙・帯金具	三角板革綴短甲1 三角板革綴衝角付冑1 頸甲1、肩甲1 草摺1		豎櫛11	
		棺内	振文鏡 勾玉6 管玉39 ガラス小玉7 滑石製白玉165	鉄刀3 鉄鏃60、矢柄	三角板革綴短甲1 三角板革綴衝角付冑(鍔付)1	刀子4	豎櫛9	
	第2主体	副室					鉄刀子7 鉄鏃5 手鎌5 鉄斧7 鍬・鋤先4 鑿？2 ヤリガンナ2	
		坑内			鞘口金具 鉄鏃41 矢柄痕		鉄刀子1 鉄斧1 鉄鏃2 鍬・鋤先2 ヤリガンナ1	

第2主体では頭部で玉類と共に1点、足元の短甲内から玉類、刀子と共に7点が出土している。中期の古墳では甲冑が伴出する場合、豎櫛は頭部の玉類と共に甲冑付近から出土する事例が少なからず知られている。茶すり山古墳と私市円山古墳の事例は豎櫛が頭部付近から出土するだけでなく共に草摺付近にも見いだされる好例で、豎櫛が単に頭飾りだけのものではなく武具にも装着したことが判る。豎櫛の呪的な性格を示すものであろう。

茶すり山古墳の築造時期については埴輪が私市円山古墳よりも古相であり、甲冑には新しい要素も見られるものの主体部の構造、鉄鏃の型式、ミニチュア農工具を含まないこと等から、私市円山古墳より若干古く中期中葉でも早い段階と考えるのが妥当であろうか。

次に茶すり山古墳と盆地内の古墳との関係のみておきたい。和田山・山東盆地には約1400基の古墳が築造された。弥生時代後期から庄内期の墳丘墓は丘陵の台状部や斜面に木棺墓を置くものでガラス玉や少量の鉄製品が副葬される。梅田東、柿坪・中山、芝花などの墳墓であるが豊岡盆地に比べると少数で北からの影響を受けて成立したと思われ、この点、福知山盆地と類似しているが古墳時代前期以降は円墳、方墳が多数築かれる。中でも若水A11号墳、城の山古墳は直径40m前後の円墳で埴輪・葺石は持たないが飛禽文鏡や三角縁神獣鏡など首長墓にふさわしい副葬品を有している。埋葬施設には礫を多用した木棺、仕切り板による3区画構造の組合式箱形木棺などが用いられている。早い段階で円墳が採用される反面、前方後円墳は中期まで待たねばならない。前期末から中期にかけて和田山盆地を中心に但馬全域で組合式木棺、箱式石棺、小型の竪穴式石槨、壺棺等々に礫床構造が広く普及し、丹後の日の内古墳、産土山古墳や福知山盆地の宝蔵山2号墳、ヌクモ古墳、ハヶ谷古墳などにその影響が及んでいる。ただ礫床の古墳には副葬品が鏡、玉、鉄器を揃えるものから、鉄製品のみ又は副葬品が無いものまであり、被葬者には様々な階層があることが判る。組合式木棺を仕切る場合は、3区画にする例が最も多い。^(注5)茶すり山古墳の4区画は珍しいがすぐ西側にある筒江中山23号墳に類例が在り、ここでは4区画とも礫床がみられる。中期の初めには和田山盆地の北西部に全長141mで盾形周濠を持ち3段築成、埴輪、葺石を有する池田古墳が登場する。中期では日本海側最大の方後円墳である。倭政権中枢の古墳形式をそのまま持ち込んだ内容をもっており中央からの派遣者との被葬者像が浮かぶ。福知山盆地では菖蒲塚・聖塚古墳が時期的には対応する。池田古墳を引き継ぐ大首長墓が茶すり山古墳である。なお茶すり山古墳の西側にある柿坪遺跡からは古墳時代中期の大型建物や初期須恵器が検出されており注目される。

茶すり山古墳以後、中期後半から後期にかけて盆地の北や南に場所を変え船宮古墳、長塚古墳、小盛山古墳、加都車塚古墳等の前方後円墳が首長墓として規模を縮小しながら継続される。その点では福知山盆地と似た様相であるが、茶すり山古墳に続く船宮古墳が全

長91mながら盾形周濠を有するなど池田古墳と同じ性格の古墳が大型円墳のあとに続く点が異なっている。倭政権からみて近畿北部の日本海への経路は福知山盆地と和田山盆地を経由するコースが本道だが、中期に池田古墳、茶すり山古墳、船宮古墳と続く首長系譜は和田山－市川ルートがより重視されていたことを証するものであろう。このことは市川下流部に玉丘古墳(107m)、壇場山古墳(141m)などの盾形周濠と長持形石棺を備えた畿内型前方後円墳が築かれていることから首肯できよう。

茶すり山古墳と同時期の古墳には梅田1号墳、東南山2・3号墳、馬場17号墳等をあげることができるが、長さ20mまでの方墳又は不整楕円形状の墳丘で、いずれも一墳丘に複数の木棺墓を納めている。副葬品は鏡・玉類が主体で沖田1号墳の石剣は注目されるものの武具・武器類はごく少数であり、茶すり山古墳との格差は大きい。

茶すり山古墳の副葬品は極めて豊富であり畿内型中期古墳として遜色はない。しかし前期古墳以来段築・葺石の伝統がないためか、段築成や墳丘設計、葺石手法等は整備されていないし前代の池田古墳に見る本格的な技術も生かされていない。また粘土槨構造とはいえ畿内の割竹形木棺に伴う粘土槨とは異質であり、遺体部分に礫を敷くことや長大な木棺を4区画に仕切る手法は但馬、とりわけ和田山盆地の在地性が色濃く認められる。この「仕切り」は畿内の木棺や石棺の小口部外側にある空間とは異なるものである。2人の被葬者は男女とは言い切れないが少なくとも第1主体の主は強大な力を得た在地の男性大首長であろう。茶すり山古墳が前方後円墳でないのは、池田古墳を継承する大首長としては認められたものの、倭政権が当地を重要視したことがかえって在地勢力への牽制、規制をもたらした結果ではないかと思われる。

3. 私市円山古墳と茶すり山古墳

私市円山古墳と茶すり山古墳は倭政権によって、前代の地域首長より前者が上位に、後者は下位に位置づけられたが、在地豪族が中央政権によって登用されたことは共通する。一墳丘多埋葬の習俗は但馬や福知山盆地以北では弥生時代後期の墳丘墓以来、古墳時代前・中期を通して丹但の地方性であるが、茶すり山古墳と私市円山古墳にみる並列2体埋葬はそれまでの多埋葬を終焉に向かわせる端緒と考えることができる。長大な組合式木棺を仕切ることも元々は多埋葬を一棺で納めようとするところから派生したことが考えられ、この仕切り板付き木棺を「但丹型長大木棺」と呼ぶことも可能である。両盆地と丹後で武具(埴輪を除く)を副葬していた例は但馬で小山1号墳、沖田11号墳、小見塚古墳、丹波で聖塚古墳、丹波荒神塚古墳、離胡古墳、ニゴレ古墳、産土山古墳など10例に満たない。聖塚・産土山古墳を除けば小型の古墳であり同じ武具を持っていても私市円山古墳と茶すり山古

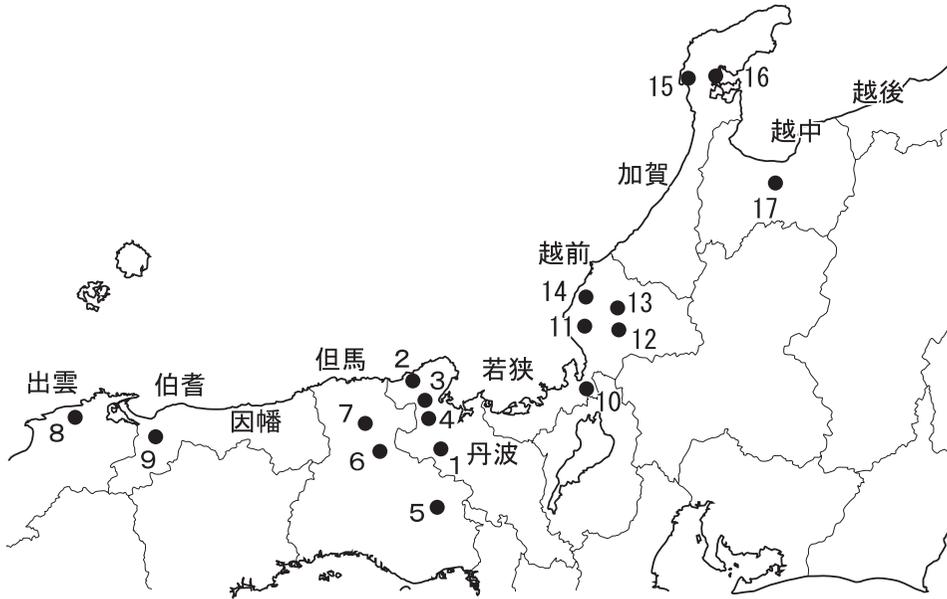
墳の突出した存在があらためて注目される。胡籙は全国で40例ばかり知られているが私市
円山古墳例はそのなかでは古相とされる^(注6)。また茶すり山古墳の鉄柄付き手斧、素環刀大刀
なども希少であり胡籙と並んで朝鮮半島との関係がうかがえる。直接入手したとは断定で
きないが可能性はある。副葬品全般に現れた両墳の大きな格差は倭政権が日本海、特に出
雲等を牽制する必要性から、福知山盆地よりも和田山盆地を山陰道の要として重要視した
表れとみることができよう。豊岡盆地を中心とする但馬北部には中期初頭にカチャ、立石、
寺谷などの中小古墳が知られているが、中期中葉から後半にかけては有力な古墳は皆無で
ある。一方、丹後地域には中期中葉に黒部銚子山古墳、産土山古墳、鳴谷東1号墳、ニゴ
レ古墳など基数は少ないものの大型古墳を初め副葬品の乏しい中小古墳もかなり存在す
る。しかし中期後半から後期前半にかけては中小の方墳や円墳が散在する程度に衰退して
いく。これは但馬では中期における政治的中心は南但馬にあり、丹波では少なくとも中期
前半は福知山盆地と丹後地域が勢力の均衡した政治状況にあったことを示し、その後中期
後半から後期にかけては福知山盆地に政治的中心が移動すると理解できる。両盆地の中期
古墳を副葬品別に分けると、1. 鏡、武具、多量の武器、玉、2. 鏡、武器、玉、3. 武
器、玉、4. 武器のみ、5. 工具のみ、6. 副葬品無しの6段階になる。云うまでもなく
私市円山古墳、茶すり山古墳はトップクラスである。和田山・福知山盆地に所在する諸古
墳を見ると隣接する盆地とはいえその地理的位置や歴史の流れによって古墳や古墳群の展
開が異なることをあらためて理解することができる。

4. 日本海沿岸における古墳時代中期の大型円墳をめぐって

最後に山陰・北陸の大型円墳^(注8)(直径約50m以上)をとりあげ私市円山古墳・茶すり山両古
墳の日本海沿岸における位置づけを検討してみたい。

丹波南部 丹波南西部の平地に周濠・埴輪を備えた中期後半の篠山市新宮古墳(径56m)
が在る。私市円山古墳からは真南へ26kmの位置にあり、いわゆる由良川－加古川ルート
で結ばれる。新宮古墳の東9kmには長持形石棺、盾形周濠を備える雲部車塚古墳(長さ
158m)がある。中期古墳としては丹波・但馬・播磨で最大の前方後円墳である。篠山盆地
には中期前半に中小の円・方墳が点在するが、車塚古墳、新宮古墳に続く古墳は知られて
いない。後期に入り全長30mクラスの前方後円墳が40基以上築造されるなど福知山盆地と
似ている。南東部の亀岡盆地には大型円墳はなく柵塚古墳、坊主塚古墳など中型の方墳6
基の存在が示すように方墳優位の地域である。

但馬北部 茶すり山古墳の北方13kmの豊岡市出石に周濠、須恵質埴輪を備えた中期後
半の茶臼山古墳(径49m)がある。但馬北部の中期古墳は前・後期に比べてきわめて少ない。



第6図 日本海沿岸の大型円墳(直径約50m以上)

- (丹波) 1. 私市円山 5. 新宮 (丹後) 2. 産土山 3. 温江大塚 4. 鳴谷東1号
 (但馬) 6. 茶すり山 7. 茶白山 (出雲) 8. 大垣大塚1号 (因幡伯耆) 9. 晩田山17号
 (越前) 10. 向出山1号 11. 兜山 12. 天神山7号 13. 泰遠寺山 14. 免鳥長山
 (能登) 15. 滝大塚 16. 水白鍋山 (越中) 17. 稚児塚

中期の中心が但馬南部の和田山盆地に在ることが判る。

丹後 中期前半に加悦谷地域に温江大塚古墳(径48m)、鳴谷東1号墳(径54m)、京丹後市の海岸部に産土山古墳(径54m)があり、野田川、竹野川流域では前方後円墳に変わって首長墓を成す。いずれも丘陵上に在る在地的円墳であるが当地の前期古墳に比べると弱体化している。規模的には茶すり山古墳、私市円山古墳には遙か及ばない。

出雲 宍道湖北岸丘陵上にある中期初頭と推定される松江市大垣大塚1号墳(径54m)のみである。その東方に後継首長として方墳の松江市丹花庵古墳(一辺48m)が在る。丹花庵古墳は平地にあり、埴輪・葺石に長持形石棺、三角板革綴短甲を有し中期前半の畿内的大型方墳として丹波の聖塚古墳との共通性が在る。出雲の中期古墳は主要なもので40基程度確認されており日本海沿岸では築造数が多い。いずれも規模的には長さ30から40mぐらいであるが方墳、前方後方墳が大半を占め、宍道湖南岸のみ前方後円墳が優勢である。日本海沿岸では若狭と並んで特異な状況である。

因幡・伯耆 米子市晩田山17号墳(径50m?)は葺石・埴輪を有しないが刀剣・斧等が出土している。中期に鳥取市櫛間1号墳、湯梨浜町北山1号墳など全長100mに達する因幡最大の前方後円墳を擁するものの中期前半の古墳は極めて少ない。中期後半には淀江の福

岡古墳群を中心に中小の円墳、前方後円墳が散在するが日本海側では出雲と並んで大型円墳が少ない。またこの地域では通常、古墳は丘陵上や谷奥部に築かれる。

若狭 前期の古墳は乏しいが、中期初頭から後期前半の若狭町脇袋古墳群では平地部に周濠・葺石・埴輪を備えた前方後円墳が累代的に築かれ、日本海側の中期古墳としては異色の展開をする。中期後葉には若狭町向山1号墳や小浜市太興寺古墳群が在る。前者は北部九州系の横穴式石室を主体部として鏡、武具や馬具など秀逸な副葬品を有し、後者は径20m前後の円墳数基から成り冑型埴輪が出土している。しかし中期古墳の絶対数は極めて少なく、後期に至って円墳の丸山塚古墳(径50m)を初め横穴式石室の群集墳が発達する。

越前 福井平野では古墳時代前期から後期まで首長墓は丘陵上に前方後円墳として築かれ、日本海側で最も安定した政治的展開を見せる。さらに中期に大型円墳が加わる。中期前葉に造出しを持つ福井市免鳥長山古墳(径91m)が前期以来の内陸部を離れて海を臨む丘陵上に築かれる。段築・葺石・埴輪など畿内の要素を強く持つが主体部に伝統的舟形石棺を採用していることは倭政権と連携した在地大首長の姿が見える。中期中葉には永平寺町泰遠寺山古墳(径64m)、鯖江市兜山古墳(径70m)が平地に周濠を備えて偉容を見せる。兜山古墳の詳細は不明であるが、中型前方後円墳の後を受けて大首長に躍り出た可能性がある。当地の大円墳は造出し又は帆立貝様の平坦部を備え舟形石棺を主体部とすることが特徴である。また丘陵上に築かれた中期前半の福井市天神山7号墳(径52m)^(註7)は埴輪を有し割竹形木棺2基を持つ。葺石を欠き農具も揃っていないが、粘土で被覆した2棺並列埋葬や甲冑、盾、刀剣、胡籥、玉類、堅櫛を持つなど茶すり山古墳、私市円山古墳と酷似している。周辺には同時期の玉や農具のごく一部を副葬する小円墳が5基ほどあり7号墳と一部族を形成していた様子がうかがえる。敦賀には中期末に造出しを持つ畿内の向山1号墳(径60m)があり倭政権の軍事体制に参画する。

加賀 中期に径50mを越える円墳はないが、中期を通して円墳が主流であり、形式的に新しい甲冑が20m前後の円墳7基から出土していることが注目される。

能登 平地に羽咋市滝大塚(長さ90m?)、中能登町水白鍋山古墳(長さ70m)^{みじろなべやま}がある。共に帆立貝型とされ中期前半の築造とされる。中期後半の滝5号墳(径50m)もあり、他に30mをこす中型古墳が10基以上知られている。中期は円墳主流の地域である。

越中・越後 古墳が希薄な東部の平地に突如として越中最大の円墳である立山町稚児塚古墳(径46m)が築かれる。50mに満たないが周濠を備え2段築成、葺石・埴輪をもつ畿内型の古墳である。越中は前期に前方後方(円)墳が盛行し、中期には円墳主体に変わるが古墳数は大幅に減少する。越後は前期に円墳や中小の前方後円墳が築かれるが中期に入ると極端に古墳数が少なくなり大型円墳もない。

以上、山陰・北陸の大型円墳の状況を見たが、その概要は次のようである。

1 中期古墳が少ない丹波南部、但馬北部、因幡、若狭、越中、越後と多い但馬南部、丹後、出雲、越前、加賀、能登に大きく2分することができる。また中期前半の古墳の絶対数が少ないのは山陰・北陸に共通している。

2 山陰・北陸で径50mを越える大型円墳は合計17基で越前5基・丹後3基、丹波・但馬・能登は各2基、出雲・因伯、越中は各1基、若狭・加賀、越後はなし、である。径70m級以上は但馬茶すり山古墳、丹波私市円山古墳、越前免鳥長山・兜山古墳、能登滝大塚・水白鍋山古墳の計6基で最大規模は茶すり山古墳である。越前・能登は畿内的な帆立貝形を含む造出し付設の大型円墳が特徴的である。茶すり山古墳、私市円山古墳以外で主体部や副葬品の一部が判るのは産土山古墳、免鳥長山古墳、泰遠寺山古墳、天神山7号墳、滝大塚古墳、水白鍋山古墳、稚児塚古墳であるが詳細不明の古墳が多く年代比定は埴輪の型式に負うところが大きい。

3 大型円墳の立地は出雲と因伯が丘陵上、能登・越中は全て平地、他の地域では平地と丘陵上が半々となっているが、中期の中小規模の古墳を加えると日本海沿岸では圧倒的に丘陵上に築かれる古墳が多い。弥生時代以来の墳墓の伝統であろう。それだけに規模を問わず新宮古墳、茶白山古墳、温江大塚古墳、泰遠寺山古墳、兜山古墳、滝大塚古墳、水白鍋山古墳、稚児塚古墳など平地に築かれ周濠をもつ古墳の特異性が際立つことになる。これらの古墳は同時期の丘陵上の大型円墳とは性格が異なり古市・百舌鳥古墳群の大王の側近一族かまたは直接の傘下にあった在地首長の可能性が考えられる。

4 これらの大型円墳は丹波・但馬のように古市・百舌鳥古墳群型の盾形周濠を持つ大型前方後円墳等に続いて築造される地域と越前・能登・越中のように地域を異にして前方後円墳に変わって大首長になる地域、出雲のように前期古墳の乏しい地域に突如中期の大型円墳が大首長墓になりその後は前方後方墳や方墳に譲る地域、若狭・加賀のように大型円墳はないが、累代の前方後円墳又は中型の前方後円墳と円墳で地域首長墓を継承し、後期を迎える地域等々がある。

5. おわりに

中期古墳の副葬品を代表する武具や武器は立地や墳形、規模の大小にかかわらず様々な古墳から出土する。倭政権は在地勢力と考えられる丘陵上の円墳の被葬者に武具、武器を提供することで内外にむけた軍事的編成の一翼を担わせたと考えることができる。越前の場合、倭政権は前方後円墳の大首長系譜とは別に新興の在地勢力である大型円墳の被葬者を積極的に後ろ盾していたと見ることができる。また若狭は規模的には大きくないものの

倭政権の直轄地とさえ思えるほどの周濠型前方後円墳を一地域に集中・継続して築いている。さらに畿内の北部に位置する但馬・丹波では池田古墳、雲部車塚古墳等に見られるように倭政権の側近等を配することで在地有力豪族を政権に取り込んでいった。山陰でも出雲・因伯には大型円墳が乏しくまた周濠を廻らす平地の古墳が無い。但馬から能登・越中にかけては、若狭の累代前方後円墳を含めて、古市・百舌鳥型の古墳が存在し山陰とは対照的である。すなわち古墳時代中期において、倭政権と距離を置き地方政権色の濃い山陰と倭政権との連合が早く進む北陸に二分される。その中間に位置する但馬・丹波は後の山陰道の入り口として因幡以西の山陰地域や大陸に対して中央政権から政治的・軍事的要衝の地として位置づけられた。茶すり山古墳・私市円山古墳は有力な在地豪族として格付けされた日本海沿岸最大の円墳として集約される。古墳時代中期はおよそ5世紀代に当てられいわゆる「倭の五王」が君臨した。内政では政権基盤を強化し外交では中国との交流を再度模索した時期である。中央と地方との関係は旧国や郡単位で結合の形態は異なり、政権側は各地の状況に応じた戦略を駆使し、対する地方はそれぞれの地域事情にそった関係を受容したのであろう。『記・紀』に見る四道將軍派遣やその後の在地化の記事等を彷彿とさせる。

本稿は私市円山古墳・茶すり山古墳の大型円墳から見た古墳時代中期の一側面を検討したものであるが、拙い論の展開が多く、また先行研究を十分に生かし切れていないがご容赦いただきたい。なお参考文献等で発掘調査報告書関係を省略させていただいたものがある。執筆に際しては但馬考古学研究会・両丹考古学研究会諸氏のご教示によるところが多く、また山下史朗氏から兵庫県内、中島雄二氏から朝来市内、三好博喜氏から綾部市内、松本岩雄氏から出雲の各古墳等のご教示や資料をいただいている。記して感謝したい。

このたび京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立30周年を迎えた。この間、多くの個人や機関の方々の理解と協力をいただいたことに対し、設立以来、直接・間接に関わってきた一人として心から感謝申し上げたいと思う。今日、埋蔵文化財を取りまく情勢は大きく様変わりしているが、今後とも当調査研究センターが京都府の歴史と文化の解明に大きく寄与していくことを祈念して筆を擱きたい。

(すぎはら・かずお=大阪国際大学教授)

注1 鍋田勇・石崎善久・高野陽子ほか「私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989

- 『史跡 私市円山古墳整備事業報告』(綾部市教育委員会)1994
- 『但馬の王墓 茶すり山古墳 調査概報』(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 学生社)2003、なお現在、本報告書が編集中でと聞いているが本稿ではこの概報に拠った。
- 注2 松井忠春「私市円山古墳出土胡籙とその系譜」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991、鍋田勇「鉄製工具・農具副葬の背景-丹波・中丹波地域を中心に」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991、石井清司「私市円山古墳と久田野古墳群-大型古墳をささえた中小古墳」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991、細川康晴「5世紀の丹波と西日本」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991、鍋田勇「私市円山古墳出土の甲冑」(『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989、鍋田勇「私市円山古墳出土の円筒埴輪」(『京都府埋蔵文化財報』第33号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989、『私市円山古墳』(綾部史談会)1990
- 注3 三好博喜「由良川流域の前方後円墳集成」(『京都府埋蔵文化財論集』第5集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 注4 平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987、中村孝行『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』(綾部市教育委員会)1984
- 注5 辻川哲朗「棺内礫敷を持つ長持形石棺-丹波・丹波地域を中心にして」(『太邇波考古学論集』両丹考古学研究会)1997、石崎善久「京都府下における礫床を持つ木棺について」(『太邇波考古学論集』両丹考古学研究会)1997、福永伸哉「近畿地方の小竪穴式石室-長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって」(『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団)1992
- 注6 注2の松井忠春1991
- 注7 『福井市史 資料編I 考古』(福井市)1990
- 注8 直径約50m以上を大型円墳とする根拠は乏しいが、30m以上とした場合にはかなりの数に上るためかえって本質がつかみにくいこと、また日本海側での中期の最大級前方後円墳である伯耆・北山1号墳、若狭・上之塚古墳が100m級であることからその約2分の1大を目安とした。

主な参考文献

- 小野山節「5世紀における古墳の規制」(『考古学研究』第16巻第3号)1970
- 『よみがえる古代の但馬』(但馬考古学研究会編)1981
- 『丹波の古墳I』(山城考古学研究会編)1983
- 川西宏幸「中期畿内政権論-古墳時代政治史研究-」(『考古学雑誌』第69巻第2号)1983
- 都出比呂志編『古墳時代の王と民衆』(『古代史復元6』講談社)1989
- 石野博信ほか編『古墳時代の研究 地域の古墳 I 西日本・II 東日本』第10・11巻(雄山閣)1990
- 『古代学研究123 特集列島各地域の円墳-主として大型円墳をめぐって』(古代学研究会)1990

- 瀬戸谷皓・潮崎誠「考古資料編」(『豊岡市史 資料編』下巻 豊岡市)1993
『前方後円墳の出現をめぐって－両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流十周年記念大会の記録』
(両丹考古学研究会編)1994
和田晴吾「古墳築造の諸段階と政治的階層構成－5世紀代の首長制的体制に触れつつ」(『ヤマト王
権と交流の諸相 古代王権と交流』5 名著出版)1994
石野博信編『全国古墳編年集成』(雄山閣出版)1995
兵庫県立歴史博物館『大王の世紀－兵庫の古墳と遺跡』1996
吉岡康暢・河村好光『加賀 能美古墳群』(石川県寺井町・寺井町教育委員会)1997
和田晴吾「古墳時代は国家段階か」(『古代史の論点』第4巻 小学館)1998
川村雪絵「古墳時代の堅櫛」(『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室)1999
櫃本誠一『前方後円墳・墳丘構造の研究 所収－帆立貝形前方後円墳について』(学生社)2001
『古代但馬の王墓』(兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所編)2002
『国指定史跡 兜山古墳－史跡整備に係る事前発掘調査報告書』(福井県鯖江市教育委員会)2003
本庄考古学研究室「出雲の主要古墳一覧 改訂版」(『島根考古学会誌』第20・21集合併号)2004
『松岡古墳群国史跡指定記念事業 埴輪から見た松岡古墳群』(松岡町・永平寺町教育委員会)2005
藤田和尊「陪冢の展開」(『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集』)2007